
甘味学園学生寮

一宮 秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘味学園学生寮

【NZコード】

N0621Z

【作者名】

一宮 秋臣

【あらすじ】

甘味戦争の終戦から五十年。国連により甘味規制法が制定され菓子は世界中で超高級品となつた。

菓子職人の候補生が集う、選ばれたエリートのみが入学出来る甘味学園。そこに巢食う変人奇人どものどたばた日常コメディー。

冒頭はシリアルスっぽいですが、完全ギャグです。物語に出てく登場人物、ストーリーについては、作者実体験に基づく、ほぼノンフィクションでお送りしています。

完全見切り発車ですが、お付き合い戴ける方は遠慮なくガンガン乗り込んで下さい。無償乗車どんといー！

甘1（前書き）

雨で暇だつたんでアホ話始めました。（冷し中華始めました風に）
登場人物は名前こそ違いますが、実在の人物がモデルです。もしか
したら、貴方の傍にいるかもしません。

甘いクレープ。芳醇な力カオの薫るチョコレート。さつぱりと酸味あるチーズケーキにふんわりとしたショーケーキ。

口どけ滑らかな水羊羹。とろけるようなみたらし団子。ひんやりと冷たいアイスクリーム。

幼い頃から、お菓子が大好きだった。

だから、思い返せば。

僕がこの道を選んだのも、半ば必然だったのだろう。

甘いものは正義だ。

「つかーな……」

滴る汗を拭いながら、結城はうんざりとぼやいた。

真夏の太陽は、その威勢を誇るかのように、かんかんとした日差しで容赦なく地上を照らしている。八月の下旬に差し掛かっても未だ衰えをみせない猛暑は、今週に入つても更に、今年最高気温を更新したばかりだ。

「くつそ、高地に来れば、少しは都内よりもマシだと思つたのに……」

周囲を濃厚な緑に囲まれた景色は、都会ではなかなかお目にかけないものだ。特に、地方に実家がない結城にとつては、鮮やかな木々の緑がよりいつそう新鮮に見える。

とはいって、イコールでそれが暑さを軽減てくれるかというと、それでもなかつた。確かに今年は節電のため都内でもグリーンカーテンなるものが流行つていて、聞いているが、これだけの量の植物を持つとしても、照りつける太陽には敵わないらしい。

「ていうか、別にカーテンになつてゐるわけじゃないから、そこまで遮熱効果を期待しても無駄なんだよな」

植物には葉の蒸散による冷却効果があるらしいが、明らかに加熱にその能力が追いついていない。

「つーか、水気が多くて逆に蒸す……」

額を伝う汗をシャツで拭き、ぱたぱたと扇ぐ。

それでもなんとか日差しから逃れようと、手でひさしを作り陽光を遮つてみるが。眩しさが軽減されたとはいえ、体感温度は欠片も変わらなかつた。

「最近じゃもう、絶対日本の気候は温帯湿润気候じゃなくて、亜熱帯に変わりつつあるよなあ」

真夏に時々都内で発生するゲリラ豪雨も、そう考へると寧ろスムーズに納得がいく。ようするにあればスコールだ。まさしく亜熱帯とかで発生している。

（ヤバい、死ぬ……）

阿呆な事を考へていると、冗談抜きに眩暈がしてきた。脱水症状を起こしては敵わない。慌ててペットボトルのお茶を煽る。疾うに温くなつてはいたが、それでも水分が体中に染み渡ると、幾分体がマシになつた気がした。

（危ない危ない。こんなところで倒れたら、マジで干からびるからな。せめてバス停までは行かないと）

氣力を奮い立たせて、歩みを開始する、駅からバス停までの距離は、徒步で十分と書いてあつた。十分ほどまことに十分は過ぎたが。

「ここで道間違つてましたー、とかだつたらさすがに泣くな」

それでもめげずにえつちらおつちら進む事しばし。否、かなり。

「……どこが十分だよ」

駅から歩くこと約三十分。ようやく見つけたバス停を前に、結城は力なく地面にへたり込んだ。

とはいへ、折角目的地（に向かうための場所）についたところの

に、地べたにへたれている理由はない。第一、アスファルトの上は熱い。極めて理性的な思考の元に立ちあがり、バス停のベンチに腰掛ける。結城は結構リアリストだった。

バス停はただ野天にベンチがおいてあるだけのタイプではなく、風雨を凌ぐためか屋根と壁のある簡単な小屋のようなものだった。雨はともかく現状では風の恩恵は受けておきたいのだが、とりあえず日差しを防げる事実に、結城は感謝した。

幸運にも隣にあつた自販機で新しく飲み物を買い、一気飲みする。喉を過ぎる清涼な冷たさに生き返る。

「ふう……行くまでに一苦労だな、こりや」

一休みしてから、バスの行き先と時刻表を確認する。幸いな事に、バス停は間違つてなかつた。
(ていうか、これで単純に迷子だつたてんなら、いつそ笑えるけどな)

胸中で自虐気味に独りごちる。先のバスは逃してしまつたようだが、どうやら一十分に一本は走つてゐるらしい。よかつた。一時間に一本だつたらどうしようかと思つた。

いくら都会っ子とはいえ、結城でも田舎の交通事情ぐらいは知つている。都内と違い、そう頻々に、バスや電車が走つていらない事は、ここに来るまでの道中でしつかり学んでいた。まあ、実際のところ、ここまで便が悪かつたのは、単に時期的なものもあるのだが。

これ以上の体力消費を避けるため、大人しくベンチに腰掛け本を読みながらバスを待つ。不意に強く風が吹き、結城は顔をあげた。

「お、来たか」

道の先に目を向けても、バスの影はあるかエンジン音さえ聞こえてこない。しかしこの時結城は、既に近づいてくる車の存在をはつきりと認識していた。

やがて。

結城が視線を向けた先から、バスがやつてくる。乗客が一人もないそのバスは、結城の待つバス停の前で止まつた。

「よお、学生さん。乗るかい？」

乗車扉の奥で、運転手が親しげに声をかけてくる。都内なら間違つてもない光景に、結城もまた笑顔で答えた。

「乗ります」

自分の財産全てを詰め込んだトランクを重そうこよつこらせと持ち上げようとするが、そんなこちらを見かねたのか、運転手の男性がわざわざ降りて手伝ってくれた。地方のバス会社はそんな事までしてくれるのか、と内心でその接客サービスに驚きはしたもの、助力がありがたい事は変わりない。頭を下げ、感謝を告げて荷物と一緒にバスに乗り込む。

「で、お客様。どちらまで？」

まるでタクシーのように行き先を訪ねてくる運転手の彼に。

「終点までお願いします」

結城は行き先の書かれた案内版を見つめながら答えた。

『甘味学園学生寮行き』

たつた一人の乗客を乗せたバスは、終点に向けてのんびりと走り出した。

嘉永六年 一八五三年のペリー来訪を機に、日本が開国を迫られて以来、それまでの鎖国のツケを洗い流すかのように、日本という國のありようは目まぐるしく変わつていった。

幕末の混亂期を乗り越え、新たに即位した明治天皇が東京に行幸し、江戸と呼ばれたかつての日の本の街を、東京という名に改めた時から、物事は万事、一気に加速して動き出した。

まず、明治一年に電報が開始した。江戸時代には手紙を届けるには主に飛脚か馬が主であつたにも関らず と、いうより他に手段がなかつた 時が明治になると同時、あつといつ間にその通信手段は姿を変えた。恐るべき速さだった。

翌、明治三年には人力車が開業。時同じくして、牛鍋屋なるものが現れ、それまであまり縁のなかつた獸の肉を庶民が口にするようになる。

同時に、散發令、太陽暦の起用、ガス灯の導入や廢藩置県、四民平等制など、諸外国を見本とし、日本は貪欲といつてもいい速度で、かつての江戸の名残を脱ぎ捨てて、世界の中に溶け込んでいくと必死であつた。

本来であれば、もつと時間をかけてゆるやかに行われるべきであつた変革は、その怒涛のような勢いと比例して、世の中にはなり小なりの混乱を少なからず生みだし、結果としてはその混亂が、後の戦争で日本を弱体化させる原因の一となるのは、また別の話である。

閑話休題。

江戸から明治への転換期には、時代に乗り損ねたもの、取り残されるもの、己が身一つで財を成し上げたものなど、多くの人々の人生を動かしたが、かといって、全ての変革が江戸の世の人々に倦厭されたわけではない。中には無論、大いに歓迎されるような変化

もあつた。

新しい菓子の登場はその一つだ。

もともと、江戸時代にも多少は存在してはいたのだが、当時は阿蘭陀としか国交がなかつた日本にとって、海外から輸入される品は非常に高価であり、団子や饅頭と違い、到底気楽に庶民の口に入る品ではなかつた。

それが、明治に入るに従つて、かつて南蛮菓子と呼ばれていた海外の菓子達は、西洋菓子とその名を変え、それまで口にする機会がなかつた人々をたちまちのうちに魅了した。もとより、時代が移れど新しいもの好きである江戸っ子の気質までは変わらない。また、帝都には逗留中の外人が住まう、居留地があつた事も、人気に拍車をかけた理由の一つだらう。

世の中には、牛鍋ブームを遙かに凌駕する西洋菓子ブームが巻き起こり、一攫千金を目指して、この新たなる分野で成功を收めようとする者も増えていた。そうして、熱狂は留まる事を知らずに、日本全国へと広がり、未来の菓子職人を目指す多くの優秀な人物達が、その作り方を学ぼうと海外へ飛び出していった。鎖国時代には考えられない出来事である。

世界各国の中でも、日本人の勤勉さと器用さは非常に有名である。日本を飛び出し、本場西洋の地で菓子の修行に励んだ留学生達は、学んだ技術を無事祖國に持ち帰り、その知識を広く世間に伝えた。また、自らも海外での経験を元に研鑽を重ね、オリジナルの菓子を多く作り出した。それらは日本国内に留まらず世界各国でも爆発的な人気を呼び、遂には菓子の逆輸入が行われるようになりやがてこれらは、日本の貿易黒字を支える重要な要となる。

日本の菓子が火付け役となり、世界中で甘味ブームが広がる一方でまた、深刻な問題も浮上してきていた。需要過多による菓子の原材料不足である。

特に、製菓材料のほとんどをヨーロッパからの輸入に頼つていた日本にとって、この事態は痛かつた。各國が競つて輸入規制を設

ける中、製菓原料の供給を求め、自給率の低い国々が結集して自由貿易を求める動きが始まる。

これが後の世に言つ『甘味戦争』の始まりであった。

当時、製菓による貿易力を国力としていた日本には軍事力がなく、結果として日本を始めとする連合軍は敗戦側となる。またそれを期に、国際法で甘味規正法が制定。原材料は勿論、完成した菓子の流通についても、国内外を問わず多額の税がかかるよなつてしまつた。

特に、勝てば官軍の言葉にあるとおり、この時結ばれた規正法の中での税率は、敗戦側に属する日本にとって、非常に不利なものであつた。

そして終戦後 甘味規正法の制定から五十年が経過した現代。
開氏四十一年。

なまじ規制が成された事により、各国での甘味需要はますます高まり、優秀な菓子職人の存在は非常に重宝され、各国は競つて菓子職人の育成に取り込んでいた。

同時に、かつての敗戦国である日本は、その優れた製菓技術を売り出す事で再び強国の座に返り咲き、また海外からも留学生を受け入れる事で、各国から原材料等の優遇措置を受けられるようにもなつていた。

関東は東京、八王子にある『第三國立甘味学園』

毎年、多くの優秀な菓子職人を輩出するそこは、全国でたつた十校しかない、菓子職人の育成のみを専門とする国営の教育機関である。

日本でも限られた人間のみが入学を許され、さらに厳選された海外からの留学生をも受け入れている、極めて特殊な閉鎖空間。

日本で唯一、何の制限もなく様々な菓子が存分に味わえる
甘味に焦がれるものにとつては聖地ともいいくべき、地上の
樂園である。

場所

廿二（後書き）

ちよつとわれっぽく書いた嘘歴史。さうまでが史実でしょ？

「 学生さん。ホラ、ついたよ。そろそろ起きなつて
聞きなれない声と共に、軽く肩を揺すられ。

「…………？」

結城は夢うつつのまま目を開いた。少々キツめの車内の空調とバスの振動に誘われ、いつの間にやら寝入ってしまった。いたらしい。たつた二十分ほどの道のりなのに、驚くほど熟睡していたようだ。長時間、直射日光にさらされて、体力が奪われていたというのも原因の一つだろう。ふと腕時計に目を向ければ、到着予定時刻から十分近く立っている。都内ならともかく、こんなド田舎でオマケにシーズンオフの山道で交通渋滞はありえない。となると、終点到着後、いつまでも降車しない乗客を気遣い、待つてくれたのだろうか。

(つまつま)

「…………つすいません！」

と、ここに到つてようやく事態を把握し、慌てて立ち上がる。

急いで荷物を降ろそうとする、運転手はからからと豪快に笑つた。

「いーつて、いーつて、気にすんな。 Bieberこのバスは、今日はもうこのあと、回送になつちまつんだからよ。どれ、貸してみる」

「い、いや、大丈夫ですから! このくらい自分でやりますよ」

当然のような顔で結城のトランクを降ろそうとする彼の手から、荷物を奪い返そうとするが、反対にあつわりと笑顔で押しのけられる。

「いーから遠慮しなさんなつて。見たとこ、学生さんも大分お疲れみたいだし、今のあんたにはこの荷物はちいと重すぎるだろ?」

そう言われてしまえば、言葉はない。都會ではあまり馴染みの無い、赤の他人との交流に、なんとなくむず痒いものを感じながら、結城は「お願ひします」と頭を下げた。事実、荷物の重さについては、身を持つて実感しているところだった。

結局トランクを運ぶのは、大の大人一人がかりでもそれなりに苦労したが。運転手の手伝いのお陰もあって、なんとか降ろすことができた。

「それにしても重い荷物だねえ」

「全部で四十キロありますから」

その答えはさすがに予想外だつたらしい。彼は驚いたように目を見張り、「よくそんなに入つたなあ」と感心したように呟いた。「何が必要になるか分かりませんからね。とりあえず、思いつくものを持ちました」

トランクの容量限界に目一杯挑んだ成果である。一度中身を取り出したら多分、否、確実にもう元には戻せない。

「大げさだなあ。言つても、同じ日本国内じゃないか。足りない物が出てきたら、後から買い足せばいいだけだろうに」

「学園内は治外法権だつて聞いてますけど……備えあれば憂いなしつていうじゃないですか。それに生憎、僕の身の回りには、この業界に詳しい人間がいませんでしたから」

素直に事実を告げると、彼はおや、といつ顔をした。

「ははあ、なるほど。君は一回生か」

「ええ。新学期が始まる前に、少しここでの生活に慣れておこうと思つて」

「そりやあ感心だ。ここには都會と比べると随分空氣が違つだらう」「一応、ここも都内の筈ですが……」

がらがらとキャスター付きのトランクを引きずりながら、苦笑を浮かべる。上下移動ならばともかく、平行移動ならこの重量でも、運ぶのにそれほど苦ではない。

なのでもう手伝いは大丈夫だと、やんわり断つたつもりだったのだが、何故か彼も並んで歩き出した。聞けば、ちょうど交代の時間らしい。

「事務所と受付は同じ場所だからな。ついでだから一緒に案内してやるよ」

「さいですか」

「今まで言つてくれるのならば、是非もない。結城は黙つて従う事にした。隣を歩く彼は、小脇に運転手用の帽子を挟み込んだまま、いかにも気安げな口調で、

「なあに、東京つつつてこの辺なんて、もうほとんど田舎みたいもんさ。京都だつて碁盤目状の土地を出れば、あとは畠だら。あれと同じだよ」

「はあ……」

そのたとえの意味はよく分からなかつたが、とりあえず頷いておく。

実をいうと、結城の実家がある練馬区も、一・二・三・四・五に入つてはいるがそれほど都会ではない。さすがにここほどではないが随分と縁も多く、新宿などの高層ビル群の並ぶ都心と比べると、かなりのんびりした土地である。頑張ればトトロに会えそうな。

「学園は大抵、郊外にありますからね。さすがに、この規模の建物と都会のど真ん中に持つてくるのは無理でしょう」

全國にある十校の甘味学園は、全て各都道府県の県庁所在地にあるが、実際に校舎が建てられているのは、その都心部からかなり離れた場所である。使用する菓子の原材料は高価なため、可能な限りの自給自足で賄うには、広大な菜園や牧場が必須となるからだ。

加えて、在校生徒への気遣いという点もあるが。

「僕の実家もそこそこ縁が多い場所とこなんですけどね。でも確かに、こっちの方が遙かに楽です。全然気持ち悪くもならないし」

「ああ、あんたも『そう』なのか。そりや都内で過ごすには大変だつたわ」

同情の眼差しを向けてくる運転手に、結城はいえ、と首を振つた。

「ま、あんたみたいな都會つ子には馴染みがない場所かもしけんけどな。徐々に慣れてく事だ。と、着いたよ。ここだ」

日本語、英語、中国語、韓国語、四力國の言葉で『受付』と書

かれた建物の前で立ち止まると、運転手の彼は手を振った。

「じゃあな、学生さん。頑張れよ」

「はい」

親切な彼に別れを告げて、改めて入り口に向き直る。

「頑張れよ……か。確かに僕みたいなのは、必死で頑張んなきや、取り残されちゃうだろうしな」

よしつと、自分に気合を入れる。

多少の不安はあったが、ここから先は自分一人だ。

結城はがらがら音を立てるどでかいトランクと共に、最初の一歩を踏み出した。

廿三（後書き）

今は冬なのになんで季節設定が夏になつてゐるかつつーと、作者の旅立ちが夏だったからです。なるべく現実に忠実に書いてます。

最初にそれを知ったのは、実のところ単なる偶然だった。

「甘味学園第三十四期生募集のお知らせ……？」

都内にある、比較的小規模な私立大学。

結城がいるのは、その構内の国際センターがある掲示板の前だつた。今度の夏休みを利用して、米国へと短期語学留学に行く予定の友人を、ソファに座つて待つてしているところである。

最近（といつてももう一年以上前だが）新しく立て替えられたばかりの新校舎は、いろいろと綺麗で便利だが、未だに建築材の臭いが強く残つているようで、結城はあまり好きでない。友人にいつたら、そんなものが分かるのはお前ぐらいだといわれてしまつたが。

「へえ……うちの大学でもこんな張り出しあつたんだ」

少し気になつたので、目新しさも手伝い、立ち上がり見てみる。結城の視力では、壁際のソファから掲示板に張られたポスターの、細かい字を見るのは少しキツい。

菓子職人への道は細く険しい。その職種の性質上、たんに好きや憧れだけでなれるものではなく、ある程度の素質や才能が必要となつてくるのだから、当然だろう。まさに『選ばれた者』の職業なのだが、一方で、その登竜門ともいいくべき甘味学園への入学に関しては、実は広く門戸が開かれている。

無論、入学自体は厳しい試験に合格しなければ出来ないが、その入試条件に関しては意外なほど規制が緩い。年齢制限や特殊資格の必要もない。実際の試験でのふるい落としがそれだけ多いということもあるが、それ以上に需要に対する供給の乏しさが原因としては一番大きい。優秀な菓子職人の存在は、どの国でも喉から手が出るほど求められている。故に業界としても、才ある人材の確保には貪欲になるのだ。

「ま、僕には縁のない世界だよな」

募集要項や概要など。つらつらと書かれた項目をなんとはなしに読んでいると、

「コウ、お待たせ　　って、あれ? 何か気になる知らせでもあつた? 講義、休校とか?」

「いや、別に。お前、もう用事は済んだのか?」
いつの間にから、背後に立つていた友人に尋ねる。相手は領き、少しこちらを気にするそぶりを見せたが、

「そ? だつたらいーけど。ゴメンゴメン、事務のおっさんの話が長くて、思ったより長びいちゃつた。ヅラの講義は混むからなー。わつせと移動しないと、席がヤバイかも」

「あ、やべ。そーだつた」

丁度降りてきたエレベーターに、友人と一緒に駆け足で乗り込む。

この時までは、ただそれだけの話であった。

授業が終わって家に帰つたものの、頭の中にはなんとなく昼間見た張り紙が残つていた。

「菓子職人、かあ　　」

ふいに思い立つて、自前のパソコンを起動させる。真っ白いパソコンはバイト代を溜めて自分で買つたお気に入りだ。

たちあがると同時に、さつそく検索画面を開いて、あれこれ調べてみる。入学条件、その後の進路、授業料など、ext, ext

調べていくうちに、なんとなく面白そ�だ、から、行つてみた
い、という思いに変わるまで、そんなに時間がかからなかつた。元
来、思い込みが激しいという事もあるが。

「大学出て何やりたいとか、特に希望もないしなー」

まだまだ先のこと　とも思つが、数年後の自分をイメージしても『何』をしてるかなんてまるで想像できない。せいぜい、社会人やつてるな、程度にしか。

(けど、僕の『体質』を考えると、つける職業つてのも限られてくるんだよなあ)

そして幸いにも、この場所は条件を満たしている。そう考えれば、これは絶好のチャンスかもしれない。

小さい頃から、結城は菓子が大好きだった。そういう意味で、今の日本に生まれた事をとても幸運に思っている。甘味規正法が出来以来、世の中の甘味は総じて高額となつており、無論、日本もその例外ではなく、店で買う手作り菓子などは未だに高級品の類だが。世界の中でもトップクラスの製菓技術を誇る、甘味大国の日本ならば、たとえ専門店で買う事が出来なくとも、コンビニスイーツという庶民の味方がある。プロの職人の監修のもとに作り出されたらしい大量製品の菓子は、それでも一般人である自分がに食べる分には充分に美味しい。

(でも考えてみりや、自分で作れるようになつたら、好きなもん何でも食い放題じゃん)

例えば。大学の友人は、この夏から海外へ留学にいくという。結城はまだパスポートさえ持っていない。

周りが少しづつ自身の道を決めていく中、自分の中にも燻る何かがあつた。何かないのか、何か。僕にも挑戦できること。

「まあ、ありつちゃありかもな」

最終的に、その結論に辿りついた頃には、既に結城の脳内で、菓子職人となつた自分の姿が燦然と描かれていた。

となれば、次の任務は親の説得である。

「なあ、父さん」

ん?と、ソファで新聞を読んでいた父が返事をしてくる。視線は、新聞からあがつてなかつたが。

結城自身、父親に目を向けていない。その眼差しは、テレビの中のとりどりのケーキ達に向けられていた。

「もしも、さ

「どう説得したものか。言ひよどむが結局名案は思いつかず、ストレートに告げる。

「もしも僕が、甘味学園に入りたいって言つたらどうする?」

「……お前、菓子職人になりたいのか?」

「い、いや、もしもだよ!もしも!今日、学校で募集のお知らせつてポスター見つけてさ。なんとなく面白そつだなーって」

「ふーん」

さして興味なさそうな様子で相槌を打つ父親を、ハテどうやつて説得したものか、と密かに脳内で作戦を練る。いや、そんなもん話題を切り出す前に練つておけ、と言いたいところだが、そこまで先に考えが回るほど結城は器用な性格ではない。生まれは鼠年だが、どちらかといふと猪突猛進なタイプなのだ。

ぐるぐると高速で頭を回転させる中、父親の口から出たのは意外な一言だった。

「いいんじやないか。別に」

「いや、まだ本決まりじゃないつていうか、ちょっとそんな事を思つてみただけなんだけど、僕なりに眞面目に考えた結果なんで、少しは検討して欲しい……つて、へ?」

きょとん、と驚いて目を見張る。ぱちぱちと瞬きする「こい、友人曰く無駄に長いまつげが揺れる。

「い、いいの?」

「ああ。お前もそろそろいい年齢だし、将来の目標に向かつて挑戦したいつていうのはいいんじやないか」

相変わらず新聞を読み続けている父親の表情は、結城の位置からでは伺えない。そのためか、いまいち相手の思考が理解出来ず、半信半疑で聞き返す。

「……つつつとも、うちからじや通えないし、一人暮らししなきやだぜ!?.学園の寮で」

「ああ。まあ、ずっと実家にいるよりいい経験だろ?。集団生活つていうのも」

シユウも寮生活だったしな、と続ける。因みにシユウとこうのは一つ上の兄で、寮制の高校を受験したため、高校三年間はずつと寮生活だった。今では実家に出戻りだが。

「でも寮生活って事は、その分金がかかるんだけど……」

「ああ。まあ仕方ないだろ?」

「それに一学園に通う事になつたら、大学とは別に学費もかかるし…余計に!」

「そのくらいなんともなる。なんだ、お前反対されたいのか?」「そういうわけじゃないけど……」

予想外にあつたりと賛成された事が信じられず、父が反撃の材料として使ってくるだろう、とシユウミレートしていたネタを、逆に自分から言つてしまつ。いや、そうじゃない。そうじゃないだろ自分。ここは寧ろ、諸手をあげて喜ぶ場面だ。とはいえ

以前、一人暮らしをしたくて地方の大学受験しようとした時は、都内で同レベルの大学に行きやいいつて、反対したの誰だよ!?

金の無駄だ。そんな必要がどこにある。そういうて言いくるめられた結果、第一志望を諦めたのは、まだ記憶の隅にひつかつている。戸惑いながらそう告げると、父親は「話が全然違うだろ?」と、呆れたように歎息した。

「あの時はお前、たんに一人暮らしをしてみたってだけだろうが。子供が本気で何かを指したいと思ったなら、それを応援しない親がいるもんか。金の問題なんか気にするな。少なくとも、子供に自由な未来を選択させてやれるくらいの甲斐性はある」

憮然とした口調で、素つ氣無く告げてくる。いらぬ事に気を回しそぎたらしくと気づいた結城は「ごめん」と素直に頭を下げた。

「で、お前本気で行く気があるのか?」

図らぬとも、お膳立ては整つてしまつた。それも、思つていたより遙かにすんなりと。だとすれば、

選ぶ道など、一つだけだった。

そうして、大学生活真っ最中に、ひょんな事から将来への道を歩み始めた結城は、編入のための勉強と卒業単位を確保するため、怒涛の学生生活を送る事となる。親に予定外の学費を申し出てしまつた身としては、留年など許される事ではなかつた。

因みに、半ばノリと勢いで田指す事となつた学園への道のりの険しさに、後ほど激しく泣きをみるのはまた別の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0621z/>

甘味学園学生寮

2011年12月5日09時52分発行